# 「あと一球」

Parade556

○　あらすじ

プロ野球、日本シリーズ最終戦を戦う選手や監督・コーチ達を描いたドラマ。第７戦は１２回延長引き分け。延長無制限、雌雄を決する第８戦。

舞台は横浜球場。勝てば初の日本一、ホームの横浜スターズ。対するは３年連続７度目の日本一を狙う絶対王者・福岡セネターズ。

主人公は勝呂賀次郎（41）。元スターズのエースピッチャー。しかし２８歳の時、フリーエージェントでその当時は弱小だったセネターズに移籍し、今の黄金時代を築き上げた大エース。しかし３年前の膝の怪我でまともに投げられなくなり、今年から選手兼ブルペンコーチとして働いている。

スターズのオーナー幸田は、自分を裏切りセネターズに出ていった勝呂を恨んでおり、セネターズのオーナー大里は、第８戦までもつれ込んだことに怒り心頭、勝呂をはじめ、監督の名取やピッチングコーチの山村をクビ

にしようとしている。
試合は、１４回表にセネターズが８点を先制。クローザーのマホームズが２アウト２ストライクまで追い込み、あと１球で試合が終わるはずが肘を怪我。
急遽、最後にブルペンに残った勝呂がマウンドに行くことに。
スタンドを埋めるスターズのファンも、スターズの選手たちもみんな勝呂の敵。特に、選手兼任監督の加藤は、スターズ時代にバッテリーを組んでいた関係で、勝呂がフリーエージェントの時、必死で止めたもののセネターズに移籍してしまったため恨んでいた。
試合は、８点差あったはずが、あれよあれよという間に追いつかれて１点差、ランナー一二塁まで追い込まれた場面で、マウンドに集まった監督や選手達。みんな諦める中で、山村だけは、
勝呂にピッチャーとしてのプライドを見せろと激を飛ばし、マウンドを離れていく。

勝呂の体はボロボロで、もう動かない。そしてバッターボックスには、誰よりも勝呂を知る・加藤が代打で向かう。

加藤は、２ストライクと追い込まれながらも、勝呂の癖を見抜いてストレートを狙い撃ち。しかしギリギリのタイミングでアウト。

セネターズの優勝で試合は終わる。

試合後、オーナーの大里と幸田は駐車場で勝呂を返せ、返さないで取っ組み合いの喧嘩をはじめ、大里は、「勝呂は生涯福岡」を宣言。

そんなことを知らない勝呂は、名取や山村とトレーナー室で自分達の将来を案じ、膝の治療のため球場を出ようとしたところで会った加藤に現役引退を告げる。翌日ラジオのスポーツコーナーで、勝呂らの契約延長の放送がある。

登場人物表

〇福岡セネターズ

勝呂賀次郎（41）（28）　投手兼ブルペンコーチ

大里大五郎（72）　オーナー

名取正（62）　監督（元捕手）

山村正平（52）　ピッチングコーチ（先発）

若宮翔（29）　ブルペン捕手

城戸耕助（25）　捕手

ティム・マホームズ（31）　投手

井沢元気（29）　通訳

その他、スターズの選手たち（内野手・リリーフ陣）

〇横浜スターズ

加藤良助（41）（28）　選手（捕手）兼監督

寺田幸之助（74）　オーナー

大村岩夫（57）　ヘッドコーチ

1番ライト　フリオ・ゴメス（27）
2番サード　五十嵐実篤（37）（24）
3番センター　大浦小次郎（31）（18）
4番ファースト　ラファエル・ゴンザレス（34）（21）
5番ショート　白戸啓介（25）
6番レフト　アロンソ・セスペデス（22）
7番キャッチャー　岩泉涼太（26）
8番セカンド　尾澤光（21）
代打　笘篠豪（34）
代走　飯田大樹（24）
代走　友寄勝次（33）
代走　野田幸之助（27）

〇その他、試合関係者
前沼健司（49）　球審
横浜球場の場内アナウンス（女性）
ラジオアナウンサー（男性）　冒頭シーン
スターズのファン、セネターズのファン
セネターズの球団職員

○横浜スターズ球場・全景（朝）

【中丸製薬　日本シリーズ】の横断幕が球場の側壁に掲げられている。

ラジオアナウンサー（声）「さぁ、ついに今夜、日本一が決まります」

○同・一塁側スタンドのゲート前（朝）

大勢のスターズファンが入場待ちの列に並んでいる。

ラジオアナウンサー（声）「第７戦の１２回延長引き分けを挟み、延長無制限、雌雄を決する第８戦は、本日１８時半から試合開始です。勝てば球団創設５３年目で初の日本一の横浜スターズ。対するは３年連続７度目の日本一を狙う絶対王者・福岡セネターズです」

○同・球場内の貴賓室前の廊下（朝）

寺田幸之助（74）が廊下を歩いている。

壁伝いに、スターズの過去の名場面シ

ーンが飾られている。
幸田、ある写真の前に立ち止まる。
スターズの背番号１８のユニフォームを着た勝呂賀次郎（28）が、史上１５人目の完全試合を達成した瞬間、マウンドでガッツポーズをしている姿。
幸田「クソっ。勝呂め」
加藤良助（41）、ユニフォーム姿（背番号82）で現れる。
加藤「オーナー。おはようございます」
幸田「おぉ、監督。朝早くから悪いね」
加藤「いやいや、やめてくださいよ。監督なんて」
幸田「だって監督だろ」
加藤「オーナーに選んでいただいたおかげです」
幸田「ウチのドラフト1位。２０００本安打達成、選ばん理由がないだろ」
加藤「ありがとうございます」
幸田「ありがとう。君のおかけでここまで来

れた」
加藤「今日、勝って胴上げさせてください」
幸田「胴上げされるのは君だろ」
加藤「いえ、オーナーも。現場全員の希望です」
幸田、勝呂の写真を見て、
幸田「この時のキャッチャーは君？」
加藤「えぇ。そうです」
幸田「なんで、君が写ってないのよ」
写真は、バックネット裏からマウンド上でガッツポーズする勝呂のアップ。
加藤「キャッチャーですから」
幸田「君がいてこその完全試合だろ」
加藤「いえ、そんな…」
幸田「ビジネスの場じゃな、自分自身の手で掴みにいかんと、何も手に入らない」
加藤「わかってる人は、わかってくれてますから」
幸田「だから、わからせるんだよ。加藤、オマエじゃなかったら完全試合できてたの

か？」
加藤「どうでしょうか」
幸田「加藤」
加藤「まず、無理だったと思います」
幸田「４回表、ツーワンからのアウトコースのボールゾーンからのスライダー。それから７回表、ノーツーからのアウトコースの真っ直ぐ…見逃し三振は、キャッチャーの勲章なんだろ？」
加藤「オーナー」
幸田「あの試合、まだまだあった。オマエがいてこその完全試合だ」
加藤「恐縮です」
幸田「でもな、ほとんどの人間は」
幸田、勝呂の写真を拳で叩く。
幸田「コイツしか覚えてない」
加藤「…」
幸田「なんか、自分の力だけで達成したみたいな顔してるな」
加藤「それが、ピッチャーって言う生き物で

すから」

幸田「腹立たしい」

加藤「えぇ」

幸田「今日、セネターズが勝ったら、こんな
顔で笑うのかなぁ」

加藤の目に、闘志が宿る。

幸田「横浜から出ていった裏切り者」

加藤、勝呂の写真を睨みつける。

幸田「球団創設初なんと考えるな。とにかく、
コイツにだけは負けられない。いいな」

加藤「はい」

○球場傍のホテル・勝呂の部屋

勝呂賀次郎（41）、福岡セネターズの
背番号18のユニフォームを着ている。

ホテルの内線電話が鳴る。

山村（次シーン登場）の声で、

山村(声)「勝呂。スイートルーム集合だって」

勝呂「え？俺もですか？」

山村（声）「監督、俺、オマエ」

勝呂「え？他のコーチは」

山村（声）「オーナー命令。１０分後」

勝呂「マジかよ」

山村、ガチャンと電話を切る。

〇同・エレベーターの中

勝呂と並んで立つ山村正平（52）。二人ともセネターズのユニフォーム姿。

エレベーターはどんどん上がっていく。

途中でエレベーターが止まる。

ドアが開き、名取正（62）がユニフォーム姿で入ってくる。

勝呂「あ、監督」

山村「お疲れ様です」

名取「おぉ。山さん」

勝呂「なんで、俺らだけなんですか？」

名取「悪いのがピッチャーだからだろ」

勝呂「いやいや、それは先発の…」

山村「（ギロッと勝呂を睨む）」

勝呂「いや、その…でも監督」

エレベーターはシースルー式で、横浜の街を見渡せる。たくさんの人達が街中を歩いている。

名取、横浜の街を見下ろしながら、

名取「今日は、お休みだったっけ？」

山村「えぇ。文化の日です」

名取「文化の日か」

勝呂「あれ？監督？」

名取「そう呼ばれるのも今日までだろうな」

勝呂「まさか」

大里の声「クビだ」

○同・スイートルーム

大里大五郎（72）の前に立たされる勝呂、山村、名取。

大里「全員、クビ」

勝呂「…いやぁ」

大里「なんだ？勝呂」

勝呂「いえ、何でもありません」

大里「初戦から3戦連続の完封勝ち。2ケタ

得点。これがウチの野球だよ。だろ名取」
名取「はい。そうです」
大里「４戦目からなんだ。ホームグラウンドで情けない。ファーボール、ファーボール、三、四がなくて、またファーボール。おかげで横浜くんだりまで足を運ぶ羽目になった」
名取「私の責任です」
山村「いえ、私です」
勝呂「…」
大里「勝呂」
勝呂「は、はい」
大里「なんで何も言わない？」
勝呂「えーと、私の担当しておりますリリーフは、まぁまぁやってるかと」
大里「バカ。先発がダメなら、リリーフなんて何の役にも立たんだろ」
勝呂「すいません」
大里「オマエ、やっぱり魂は横浜に置いてきたな？そうだろ。俺を騙そうったって、そ

うはいかないぞ」
勝呂「いえ、１３年前、フリーエージェントの時に福岡まで連れてきました」
大里「じゃあ、なんで投げない。その背番号は偽りか」
大里、勝呂の背番号１８のユニフォームを指さす。
勝呂「あれ？えーと何のことでしょうか。ん？おかしいな」
大里「エースナンバーじゃないのか。１８は」
名取「そうです」
山村「間違いありません」
勝呂「（大里に聞こえないように）クソっ。いや、オーナー。あ、えーと今年はコーチ兼任でして」
大里「兼任？兼任ってことはあれだ、現役でもあるわけだろ」
勝呂「そうなんですかね？」
大里「今日、勝呂を先発にしろ」
名取「待ってください」

山村「お言葉を返すようですが、さすがにそれは」
大里「兼任だろ？選手なんだろ？」
名取「申し訳ございません。それだけはお許しください」
山村「正直、草野球でも打たれるレベルで」
勝呂「山さんッ」
大里「オマエ、ウチに来てから何勝した」
勝呂「１３５です。えっへん」
大里「今年は？」
勝呂「あれ？どうだったかな？えーと２から３は…」
山村「０だよ」
勝呂「山さん」
大里「過去の１３５勝より、今日の１勝がほしいんだ俺は。５年間なら、今日みたいな分水嶺のゲームは迷わずオマエだった。先発完投させてた」
名取「４年前でもそうかと」
山村「いや、３年前の春先まででしたら」

大里「誰が兼任を許したんだ」
勝呂「え？オーナーが熱望されたって、アレ？」
勝呂、名取を見る。
名取、目をそらす。
大里「俺はそんなこと言わんよ」
勝呂「そんなぁ」
大里「こんな奴、今すぐ二軍に落とせ」
勝呂「（小さい声で）よし」
名取「ブルペンコーチがいなくなります」
勝呂・大里「チッ」
山村、勝呂を見る。
勝呂、顔をそむける。
大里「とにかく、今日、負けるようなことがあったら、間違いなくクビ。で、勝っても、勝ち方が悪かったらクビだ」
勝呂「具体的に言いますと？」
大里「そんなもん、観てから決めるに決まってんだろ」
勝呂「すいませーん」
大里「早く練習してこい」

勝呂、名取、山村、慌てて出ていく。

○同・エレベーターの中

3人、無言。

名取のフロアに着き、名取、無言で降りていく。

勝呂と山村、二人になる。

山村「忘れんからな」

勝呂「何をです？」

山村「さっき、俺を売ろうとしたこと」

勝呂「いや、でも山さん」

山村「そもそも、オマエのせいだからな」

勝呂「は？」

山村「オマエが先発できたら、こんなことになってない」

勝呂「いやいやそれは責任転嫁だよ」

山村「5年前のオマエがいたらなぁ」

勝呂「3年前の春先までだろッ」

エレベーターが二人の階に着く。

お互い、そっぽを向きながら降りてい

く。

○同・勝呂の部屋の前

山村、隣の部屋に入っていく。

勝呂「なんで俺のせいなんだよ。クソっ」

勝呂、忌々し気に自分のユニフォームの背番号１８を見て、

勝呂「代えてもらえばよかった」

○横浜球場・スタンド（夜）

満員の観客。ほとんどが横浜スターズのファン。

試合前、両チームの先発投手がブルペンでピッチング練習をしている。

＊球場のファールゾーンに設置されたブルペン（西武ドームや神宮球場のような）。

○同・貴賓室（夜）

幸田、大里を、両手を広げて迎え入れ

る。

幸田「ようこそ」

大里「いやいや、こんないい部屋をご用意いただいて」

寺田「球界の盟主をお迎えするんですから、当然ですよ」

大里「そんなそんな、私なんぞ」

寺田「この部屋は、セネターズさんのホームグラウンドを参考にさせていただいたんですよ」

大里「そうでしたか」

寺田「いやいや、それより試合試合。どうぞ、お座りください」

貴賓室の窓際に、２つの席が用意されている。

大里と幸田、並んで座る。

○同・三塁側ブルペン（夜）

勝呂賀次郎、腕組みして背番号１１・今井裕也（27）のピッチングを見てい

る。
勝呂の隣には、山村。
今井、ブルペンキャッチャーの背番号０１４・若宮翔（29）のミットに向かって、ストレートを投げ込む。
観客Ａ「（勝呂に向かって）この裏切者」
勝呂、腕組みしたまま前を向いてる。
観客Ｂ「（勝呂に向かって）横浜にくるな。この金の亡者」
勝呂「（呟くようにして）来たくて来てるわけじゃねぇよ」
山村「人気者だな」
勝呂「どこが？」
山村「はは」
勝呂「俺、隠れてていいですか？」
山村「オーナー、見てるぞ」
山村、視線を上げる。
球場のバックネット裏、上段にある貴賓室、大里と幸田が並んで見ている。
勝呂「クソっ」

山村「オマエ、目いいだろ。今、どんな顔してる？」
勝呂「あぁ、二人で仲良く話してますよ」
山村「試合前だしな」
勝呂「勝ち方って言われてもなぁ」
山村「ま、とにかく勝つしかないだろ」
勝呂「どんな勝ち方すりゃいいんですか？」
山村「（貴賓室の方に顎をしゃくり）聞いてくれば？」
勝呂「無理っス」
その後も、次から次へと勝呂に向けて罵声を浴びせるスターズのファン。

○同・貴賓室（夜）
大里と幸田、並んで見ている。
幸田「しかしまぁ、調子がよさそうですね。エースの今井くんは」
大里「どうでしょうかね。投げてみんとわからんところがありまして」
幸田「エースは勝呂でしょう。一応、背番号

的にも」
大里「いやいやお恥ずかしい。怪我でなかなかどうして」
幸田「ウチにいた時は、大車輪の活躍でしたがね」
大里「いやいや、ウチでも頑張ってくれましたよ。１３５勝もしてくれました」
幸田「そりゃ、あんな巨大戦力がいれば勝ちますよ」
大里「いやいや、どうも」
幸田「本当に羨ましい限りです」
大里「何をおっしゃいますやら」
幸田「ウチは、まるでゴリアテと闘うダビデだ」

貴賓室の入口からスタッフ（中年男性）が大里に声をかける。

スタッフ「オーナー」
大里「なんだ。試合前に」
スタッフ「申し訳ございません」
大里「失礼。中座いたします」

幸田「どうぞどうぞ」

大里、部屋を出ていく。

○同・貴賓室の廊下（夜）

大里、イライラした顔で、

大里「まったく。いちいち、癇に障る野郎だ」

スタッフ「オーナー。こちらです」

大里「立ちあがりに失点してみろ、全員クビにしてやるからな」

○同・三塁側ブルペン（夜）

勝呂と山村、先発の今井のピッチングを見ている。

キャッチャーの城戸耕助（25）、三塁側ベンチから歩いてきて若宮の隣に立つ。

若宮、今井に返球すると城戸にキャッチャーを代わる。

今井、勝呂の方を見て、

勝呂「良いね。ばっちりじゃん」

今井「マジ、投げたくねぇっス」

勝呂「なんでよ。めっちゃ美味しいじゃん」
今井「じゃあ代わってくださいよ」
勝呂「５年前なら、今日は俺ですよ。ね、山さん」
山村「そうね」
勝呂「いやぁ投げたいなぁ。３０年前なら投げたいでしょ。山さんも」
山村「そうね」
今井「いいなぁ、コーチって」
勝呂「俺、選手兼任だし。場面によっては今日もいっちゃうよ。ね、山さん」
山村「そうね」
勝呂「いやいや、無理でしょ」
山村「兼任だから」
勝呂「草野球でも打たれるんでしょ？」
山村「逆に、というのはある」
勝呂「そんな惨めな思いしたくねぇわ」
今井「ちょっと、ほら、見てくださいよ。オレ、足、めっちゃ震えてる」
山村「惨めでも勝てばいいんだよ」

今井「俺、そんな惨めっスか？」
勝呂「オマエのことじゃねぇよ」
今井「もっと盛り上げてくださいよ。俺のこと」
勝呂「自分で何とかしろ」
今井「良いよなぁ、コーチは」
城戸「今井さん。どんどんいきましょう」
城戸、キャッチャーミットをストライクゾーンのど真ん中に構える。
今井、城戸の方を見ると、
今井「キャッチャーはいいよな。気楽で」
勝呂「まぁ…ね、山さん」
山村「キャッチャーなんてな、ただピッチャーの球受けてるだけだ。それなのに野球を語りやがって。偉そうに」
勝呂「山さん。キャッチャー嫌いすぎでしょ」
今井「アイツらとは一生、分かり合えそうにない」
勝呂「ソレ、監督の前では言うなよ」
今井「わかってますよ」

今井、セットポジションになり、ストレートを投げ込む。
城戸のミットが良い音を立てる。
城戸「来てる来てる」
勝呂「（真似て）来てる来てるぅ」
城戸、今井に返球する。今井、受け取ると、
今井「生まれ変わったら、キャッチャーやろうかな？」
山村「やめとけ。根性腐るぞ」
勝呂「根性は腐るかもな」
山村「野球はピッチャーにはじまり、ピッチャーで終わるんだ」
今井「わかってますって。そんなこと」
勝呂、視線を一塁側ブルペンに向ける。
加藤が、先発投手の脇に立ってピッチングを見ている。
勝呂、加藤と目が合う。
勝呂、周囲に見えないように中指を立てる。

てめぇ、と目を見開く加藤。
勝呂、素知らぬ顔で視線を逸らす。

○同・貴賓室の廊下（夜）
大里、勝呂の完全試合の写真を見ている。

大里「オマエがちゃんと…クソっ」
幸田「大里さん」
大里「あぁ。どうも。すいません」
幸田、チラリと勝呂の写真に目をやるが、何も言わない。
幸田「そろそろ試合がはじまりますよ」
大里「えぇ。失礼しました」
大里、幸田の後につづいて歩いていく。

○同・一塁側ベンチ（夜）
加藤、腕組みをしながらグラウンドに走っていく選手たちを見ている。
カクテル光線に照らされ、大歓声をあびながらポジションに走っていく選手

達。

加藤、三塁側ブルペンで今井のピッチングを見守っている勝呂を見て、

加藤「勝呂、てめぇだけには負けねぇからな」

○同・三塁側ブルペン（夜）

セネターズの一回表の攻撃が終わる。

城戸、立ち上がるとグラウンドに向かって歩いていく。

今井「やっぱ吐きそうっス」

勝呂「初回から飛ばしていけ。ブルペンに１２人いるんだから」

今井「１３人でしょ」

勝呂「１２人だろ。ね、山さん」

山村「１３人」

勝呂「いやいや無理でしょ。俺は」

山村「今井。飛ばしていけ」

勝呂「あれ？山さん？」

今井「もー。無理だよぉ」

今井、ブルペンからマウンドに向けて

走っていく。
若宮、勝呂と山村のそばまで来て、
若宮「球は来てましたよ」
勝呂「山さん？俺の話聞いてます？」
山村「じゃ、頼むぞ勝呂」
山村、ベンチに向かって歩いていく。
勝呂「えぇ、わかりました。あ、山さん」
山村、振り返る。
勝呂「あのぉ…なんか、めちゃくちゃ大差つ
いた場面とかなら行けるかも」
山村「まぁ、あんまり気にするな。最終的に
は監督が決めるから」
勝呂「いやいや気にするでしょ」
山村「じゃ、よろしく」
山村、三塁ベンチに戻っていく。
若宮「何の話ですか。あ、登板は無理でしょ
勝呂さん」
勝呂「わかってるよ」
若宮「高校野球レベルだもん」
勝呂「え？それ、草野球とどっちが上？」

若宮「そりゃ高校野球でしょ」
勝呂「高校野球もレベルがあるだろ」
若宮「一応、甲子園出場校レベルかな、と」
勝呂「まぁ、そんなもんか」
若宮「鳥取とか島根あたりの」
勝呂「せめて関西にして」
勝呂、ブルペンのベンチに座り爆笑する
るリリーフ投手に対して、
勝呂「木田、石山。肩作れ。３０球だ。笑っ
てんじゃねぇ」
二人のリリーフ投手（Ａ、Ｂ）が立ち
あがる。

○同・貴賓室（夜）　試合（ダイジェスト）
大里と幸田、スコアボードを観ている。
５回までスコアボードに０が並ぶ。
ブルペンから、リリーフ投手（Ａ）出
ていく。
今井と交代。
ブルペンでは、二人の投手（Ｂ、Ｃ）

が準備している。

×　×　×

７回。

スコアボードに０が並ぶ。

ブルペンから、リリーフ投手（Ｃ）出ていく。

ブルペンでは、二人の投手（Ｄ、Ｅ）が準備している。

×　×　×

９回。

スコアボードに０が並ぶ。

ブルペンから、リリーフ投手（Ｅ）出ていく。

ブルペンでは、二人の投手（Ｆ、Ｇ）が準備している。

大里、手元の手帖を見る。リリーフ投手の名前が書かれている。

１２人のリリーフ投手の名前。５人目（Ｅ）に×をつける。

×　×　×

１４回の攻撃開始前。
大里、手元の手帖を見る。
マホームズ以外、すべて×がついている（勝呂の名前は書かれていない）。
×　　×　　×
１４回表の攻撃が終了。
スコアボード、セネターズが大量８点を先制。
幸田、苦虫を噛み潰したような顔。
大里、嬉しさを我慢しきれない顔。しかし何とか我慢している。
対照的な二人の表情。

○同・三塁側ブルペン（夜）
スタンドは静まりかえっている。レフトスタンドの福岡セネターズのファンだけが大盛りあがり。
ティム・マホームズ（３１）、ピッチング練習中。１６０キロのフォーシームを若宮のミットに投げ込む。

勝呂、マホームズのピッチングを見ている。

勝呂「頼むぞティム」

マホームズ、気合十分の表情。

マホームズ、若宮のミットにフォーシームを投げ込む。

マホームズ「ＹＥＳ」

勝呂「ナイスボール」

マホームズ「ＯＫ。ガジローちゃん」

勝呂「おし。頼むぞ」

勝呂、マホームズにタオルと紙コップに入った水を渡す。

マホームズ、タオルを受け取ると顔をゴシゴシ拭き、紙コップの水を飲む。

マホームズ、タオルと紙コップを勝呂に返すと、

マホームズ「レッツゴー」

マホームズ、テンションＭＡＸでブルペンを出ていく。

場内アナウンス「福岡セネターズ、ピッチャ

ーの交代をお知らせします。白瀬に代わりまして、マホームズ」

セネターズのファンから歓声が上がる。

場内アナウンス「ピッチャー、マホームズ。背番号２２」

マホームズ、マウンドに向かってダッシュしていく。

勝呂のそばに若宮がくる。

若宮「あとアウト３つですね」

勝呂「俺、投げさせてくんないかな」

若宮「さすがにそれはズルい」

勝呂「一番美味しい場面じゃんか」

若宮「ですね」

勝呂「ちくしょー」

若宮「セリフおかしいですって」

勝呂、手帖を開き、マホームズの名前のところに×をつける。

若宮「ティムなら余裕ですよね」

勝呂「あぁ。メンタル的にも申し分ない」

スコアボード、マホームズのシーズン

成績が表示されている。
５６試合登板、４１セーブ。防御率０，４３。

○同・貴賓室（夜）
幸田、大里に手を差し出す。
幸田「いやいや、おめでとうございます」
大里「何をおっしゃいますか」
大里、幸田の手を握り返す。
幸田、反対の手を大里の手に重ねる。
大里も同じことをする。
幸田「見事なチームです」
大里「まだまだ試合は終わってませんよ」
幸田「しかしさすがにマホームズじゃ」
大里「彼も人間。何が起こるかわかりません」
幸田「はは。なんだかチームが逆になったようですね」
大里「はは。確かに」
二人、手を離す。
幸田「さぁ、最後の回を楽しみましょう」

大里「そうですね」

幸田、大里と反対にある手を、ぐっと握りしめる。

大里、笑みがこぼれそうになるのを必死で我慢している。

○同・三塁側ブルペン（夜）

勝呂と若宮、ブルペンのベンチに並んで座っている。

スコアボードは2アウト。ノーボール2ストライク。あと一つストライクをとれば試合が終わる。

静まり返るスタンド。レフトスタンドのセネターズのファンだけが、

セネターズのファン「あと1球。あと1球」

＊勝呂と若宮が会話している間もずっとつづく。

勝呂「さすがに、もう大丈夫か」

若宮「そうですね」

勝呂「この後、どこ行く？」

若宮「ザギンですか？」
勝呂「結果、いつものとこだろうな」
若宮「えー、川崎ですか。こっち来たら毎回
じゃないですか」
勝呂「結局、落ち着く」
若宮「生粋のハマッコなんですから、ハマの
良いとこ連れてってくださいよ」
勝呂「外向けの店しかないんだよ。横浜は」
若宮「外向け？」
勝呂「外面だけは良いんだ。この街は」
若宮「はぁ」
勝呂「うんこしてこようかな」
若宮「もう終わりますよ」
勝呂「確かに、終わりの瞬間は見たい」
若宮「ですよね」
マウンドで、マホームズが捕手・城戸
のサインにうなずき、セットポジショ
ンになる。
勝呂と若宮、グラウンドを見る。
マホームズ、投げる。スプリットがワ

ンバウンド。
1ボール2ストライク。
スタンドを埋めるスターズファンから、ヤケクソのような拍手と歓声が沸く。
マホームズ、城戸からの返球を受け取る。
セネターズのファン「あと1球。あと1球」
マホームズ、ベンチを見る。
ベンチから山村と通訳・井沢元気（29）が出てくる。
セネターズファンから「あと1球」コールが止む。
スターズのファンがざわつきはじめる。
○同・三塁側ベンチ（夜）
蜂の巣をつついたような騒ぎになるスターズベンチ。
選手A「え？どうした？どうした？」
選手B「ヤバいんじゃないのか。おい」
監督の名取正（62）、腕組みしてマウン

ドを見ている。

○同・三塁側ブルペン（夜）

マホームズ、マウンドで山村と井沢と話している。

若宮「あれ？どうしたんですかね」

勝呂「いや、大丈夫だろ」

若宮「ですよね」

勝呂「あ、ヤバい」

若宮「なんかありました？」

勝呂「…マジで腹痛くなってきた」

若宮「はい？」

勝呂「あ、マジだ。これ」

若宮「（ブルペンのマウンド指さし）さっき、なんかあったのかなと思ったじゃないですか」

勝呂「あー、腹イタ」

若宮「勝呂さん」

勝呂「話しかけるな」

若宮「ストレッチやりますか？」

勝呂「動きたくない。今」
若宮「念のためです」
勝呂「動いたら出そう」
若宮「いや、やっときましょう」
勝呂「だから、動いたら出るんだって」
若宮「出てもいいから」
勝呂「…へんたい」
若宮「状況、わかってます？」
勝呂「そっちこそわかってんのか」
若宮「いやいやいや」

マホームズ、山村、井沢と一緒に三塁ベンチに戻っていく。

若宮「ほら。ほら。勝呂さん」
勝呂「揺するな。出る」
若宮「ストレッチ、ストレッチ」
勝呂「今はただ…過ぎ去るのを待とう」
若宮「待ってる場合じゃないでしょ」
勝呂「そう。待てば終わる。信じろ。信じろ俺」
若宮「勝呂さん。まだ現役でしょ？」

勝呂「ちょっと何言ってるかわからない」
若宮「マホームズが投げられなくなったらどうするんですか」
勝呂「諦めよう」
若宮「状況わかってんじゃねぇかよ」
勝呂「あー、腹イタ」
若宮「勝呂さんが投げるんですッ」
勝呂「揺するなっての…俺、コーチ」
若宮「兼任。まだ現役」
勝呂「え？」
若宮「聞こえてんだろ」
勝呂「もう無理だ」
若宮「何言ってんですか」
勝呂「あー、腹痛い。無理だ」
若宮「じゃあとりあえず便所」
勝呂「お前、お便所までついてくるだろ」
若宮「あたりまえでしょ」
勝呂「えっち」
若宮「腹、痛くないでしょ？ほんとは」
勝呂「…痛いよ」

若宮「優勝決定の瞬間ですよ」
勝呂「いや、俺は遠慮しとくよ」
若宮「おいしい場面でしょ」
勝呂「良いなぁ、試合でなくていい奴は」
若宮「アンタ最低だよ」
勝呂「あ、漏れたかも」
若宮「よし。さ、やりましょう」
若宮、立ちあがる。勝呂を立たせようとするが、勝呂、頑として立とうとしない。
勝呂「若宮くん。今シーズンの俺の登板、憶えてる人？」
若宮「登板数１。しかも大差の試合で出て、１イニング５失点。四死球３」
勝呂「防御率は？」
若宮「酷すぎて計算したくない」
勝呂「ね」
若宮「で？」
勝呂「いや、しかもさ、アピール的な感じになるじゃん」

城戸「は？」
若宮「つまり、監督にオレ行けますよ的な、
それは避けたい。この場面」
若宮「マジで何言ってんだアンタ」
勝呂「えーと、えーとそうだな。あ、そうそう。監督がやれって言ったらやる。監督が。
若宮ちゃんは監督？」
若宮「ブルペンキャッチャーですね。キャリア7年の」
勝呂「もう7年になるかぁ。そういえば…」
若宮「（遮って）いいから。俺の話は」
ブルペンの電話が鳴る。
若宮「鳴ってますよ」
勝呂「え？」

○同・三塁側ベンチ（夜）
名取が、険しい顔で内線電話の受話器を持っている。
その手が、わなわなと震えている。

○同・三塁側ブルペン（夜）
若宮、ブルペンについている電話の前に立っている。
勝呂、腹を抱えるようにしてベンチに座っている。
若宮「いや、鳴ってますって」
勝呂「間違い電話でしょ」
若宮「内線ですから」
勝呂「いや、間違いだって」
若宮「もう（電話に出て）、もしもし。あ、監督。あ、勝呂さんですね。すぐ代わります。勝呂さん。監督です」
勝呂「え？俺？」
若宮「勝呂出せって」
勝呂「何、そのノリ」
若宮「勝呂さん」
勝呂「わかったわかった（電話に出る）もしもし」
名取の声（以下、名取）「何ですぐ出ない？」
勝呂「珍しいですね。普段は、山さんからし

か…」

名取「（遮って）緊急事態だからな」

勝呂「緊急事態？」

名取「いや、オマエの声を聞いて安心したよ」

勝呂「いや、それは何よりです。それで何でしょう？ご用件は」

名取「おまえ、試合見てる？」

勝呂「もちろんです。ブルペンコーチですから」

名取「今、マウンドに何が見える？」

勝呂「マホームズが」

名取「は？」

勝呂「監督。コーチは、常に未来を見てるんです」

名取「なるほど」

勝呂「５分後、治療を終えて戻ってきた姿です」

名取「リリーフ陣は、よくここまで闘い抜いたよな。シーズン、クライマックスシリーズ、日本シリーズ７戦目の延長１２回を経

て、今日だよ」
勝呂「はい。みんな、よく頑張ってくれました。サイコーですよ。アイツら」
名取「まさか、オマエがこんな良いコーチだと思わなかったよ。リリーフ陣が見違えるように変わった」
勝呂「私なんて何も」
名取「謙遜するなよ。オーナーに、今シーズンから兼任をお願いしたのは俺なんだぞ」
勝呂「チッ、余計なことを」
名取「なんか言ったか？」
勝呂「いえ、何も。あ、そうだ。あと1球で終わりですね」
名取「その通り。あと1球だ」
勝呂「待ちましょう」
名取「そうだな。俺は座して待つばかりだよ」
勝呂「えぇ。私もおなじ気持ちです」
名取「勝呂。頼みがあるんだが？」
勝呂「私にできることでしょうか？」
名取「勝呂。俺はな、常に相手の力量を見て

る。見た上で頼む。現役時代からの癖かな？」
勝呂「よっ、令和の名将」
名取「若宮に受けてもらえ」
勝呂「若宮？」
名取「ブルペンキャッチャーだよ。今年で６年目かな」
勝呂「ブッブー。違いますよぉ」
名取「アイツ、何年目だったかな」
勝呂「さて、何年目でしょうかぁ？」
名取「何年目だって良いッ。とにかく、若宮に受けてもらえ」
勝呂「７年目です。７年目」
名取「最後の１球は、オマエが投げろ」
勝呂「いやいや、マホームズに譲りますよ」
名取「わ、か、み、やに受けてもらえ」
勝呂「草野球でも打たれるんですよ」
名取「あと１球だ。しかもランナーなし。８点差。リトルリーグのピッチャーでも抑えられる」
勝呂「リトルリーグは酷い」

名取「とにかく肩を作らんか。このバカチン
がッ」
勝呂「ソレ、パワハラじゃないかなぁ？」
名取「業務命令じゃ」
勝呂「いや、怪しいところですよ」
名取「日本シリーズが終わったら裁判所で争
ってもえぇ。コレは業務命令じゃ」
勝呂「監督。マホームズを待ちましょう」
名取「俺だってそうしたいわ」
勝呂「信じるものは救われる、ですよ監督」
名取「（ひとつ息をつく）マホームズが怪我で
投げられないかもしれない。もう一人、ブ
ルペンにピッチャーがいる。オマエが監督
だったらどうする？」
勝呂「ぼく、監督には興味なくて」
名取「２０年前、俺もそう言ってた。でもな、
やってみたら誰にも渡したくなくなる。そ
ういう仕事だ」
勝呂「ぼくはそうはならないかと」
名取「もう１回、言う。肩を作れ」

勝呂「ご冗談を。最悪、負けますよ」
名取「その時はクビだ。クビなだけじゃないぞ。玄界灘に放り込まれることになる」
勝呂「誰が？」
名取「俺と、オマエ」
勝呂「山さんは？連帯責任でしょ」
名取「最近、あそこはサメが出るらしいな」
勝呂「ちょ、ちょっと待ってください。セネターズで１３５勝した平成の大エース勝呂賀次郎ですよ。ぼくは」
名取「貴賓室、見てみろ」
勝呂、貴賓室を見上げる。
名取「オーナー、どんな顔してる」
勝呂「…」
名取「オマエ、目が良いから羨ましいよ」

○同・貴賓室（夜）
大里、怒髪天で勝呂を見ている。
隣の幸田も、親の仇でも見えるような目で勝呂を見ている。

○同・三塁側ブルペン（夜）

勝呂、貴賓室から目をそらし、

勝呂「なんでアンタまで俺を睨むんだよ」

名取「あとワンストライクだ。イケ」

ブルペンの電話が切れる。

勝呂「クソっ。マジでキャッチャーって生きもんは。何もわかってねぇな（マウンドを見る）あそこの怖さが」

○同・三塁側ベンチ（夜）

電話が鳴る。名取、電話をとる。

勝呂の声（以下、勝呂）「監督、この球場だけはマズいですよ」

名取「何言ってんだ。元ホームだろ」

勝呂「いやいや、石持てで追い出されたんですよ」

名取「勝呂、お前はなんにも間違ってない。プロの価値は金だ」

勝呂「ソレ誤解なんですって。俺はただ勝ちたくて」

名取「セネターズがスターズよりたくさん金を出した。だから移籍した。縁もゆかりもない福岡に」
勝呂「傷つくなぁソレ」
名取「オマエはもう、立派な九州人だ」
勝呂「いやいや、ぼくは、生涯、スターズで終えるつもりだったんです」
名取「傷つくなぁソレ」
勝呂「監督」
名取「これも運命だ。胸を張れ」
勝呂「胸なんか晴れるかッ」
名取「２回までは聞き流してやる」
勝呂「聞こえてたのかよ…監督、今日勝てば、スターズは初の日本一なんです」
名取「それで？」
勝呂「マウンドに、横浜を裏切ったぼく」
名取「すごいドラマじゃないか」
勝呂「監督」
名取「喋ってるうちに体もあったまったろ」
名取、電話を切る。

電話が鳴る。名取、電話をとろうとしない。

○同・三塁側ブルペン（夜）

勝呂、受話器から手を離さない。

勝呂「（電話してるフリ）なるほど、それは困りますね。ですけど監督」

若宮、勝呂から受話器を奪おうとする。

勝呂「何やってんだ。まだ話してるだろ」

若宮「いやいや」

若宮、三塁側ベンチを指さす。

名取、腕組みして座っている。

勝呂「あれ？あ、電話切れてる。いつの間に」

勝呂、電話を切る。

若宮「（バシンと拳でミットのポケットを叩き）さ、やりましょ」

勝呂、立とうとしない。

若宮、無理矢理勝呂を立たせた瞬間、

三塁側スタンドから、

スターズファンA「この裏切り者がぁ」

スターズファンB「金の亡者ぁ」
スタンドから裏切り者の大合唱。用意周到に『金の亡者』というプレートを掲げるファンがいる。
若宮、圧倒される。
勝呂、塩をかけられたナメクジのように萎れてしまう。
若宮「これはすごい」
勝呂「…」
若宮「なんでこんな」
勝呂「13年前のことだぞ。いい加減忘れろよ」
若宮「ハマっこでしょう。この人ら」
勝呂「オマエ、なんか勘違いしてないか？ハマっこってのはな、日本一、執念深いんだよ」

○同・一塁側ベンチ（夜）
加藤良助、ベンチの一番端に座って三塁側ブルペンを睨んでいる。

加藤の隣に立つ大村岩夫（57）、加藤に
向かって、
大村「監督。勝呂が投げるんでしょうか」
加藤、立ちあがってベンチの中を睨み
つけると、意気消沈した選手やコーチ
たちに向かって、
加藤「金で横浜を捨てた人間に負けていいの
か、オマエらッ」
選手たち、うつむいたまま。
スコアボードは８対０。２アウト１ボ
ール２ストライク。
逆転の可能性は限りなく０に近い。

○同・三塁側ブルペン（夜）
勝呂、若宮に引っ張られてマウンドに
向かう。
観客Ａ「この裏切りモノがぁ」
観客Ｂ「金の亡者ぁ」
勝呂「いや、無理無理」
勝呂、若宮の手を振りほどいてマウン

ドから降りていく。
若宮「いやいや勝呂さん」
その間も、ファンの罵声はつづく。
勝呂「いや、無理無理」
若宮「嬉しいじゃないですか。こんな応援してもらえて」
勝呂「どこが？」
若宮「お金は、大事ですよ」
勝呂「そうじゃないんだって。俺はただ、勝ちたかっただけなんだよ」
若宮「決断は間違いじゃありませんよ。常勝軍団の大エース。はい」
若宮、勝呂にボールを渡す。
勝呂「何？コレ」
若宮「ボールです」
勝呂「いらない」
若宮「肩つくらんでマウンド行きます？」
勝呂「くっ」
勝呂、若宮からボールを奪い取るように受け取る。

勝呂「重いよ。無理だ」

勝呂、若宮にボールを返す。

若宮、受け取らず、

若宮「さ、やりましょ」

勝呂「無理だ」

若宮「あと1球、ストライクとればいいんです」

勝呂「あ」

観客（スターズファン）からどよめきが起こる。

ベンチからマホームズが出てくる。

○同・一塁側ベンチ（夜）

加藤と大村、並んで見ている。

大村「監督。マホームズ、出てきました」

加藤「見てたらわかるよ」

大村「マホームズ、投げられるんでしょうか？」

加藤「投げられるから出てきたんだろ」

大村「まいったな」

加藤「いちいち思ったことを口にするな」

マホームズ、マウンドに立つ。

大村「監督。監督」

加藤「ちょっとは落ち着け」

ネクストバッターズサークルに立つ岩泉涼太（26）。

大村「岩泉。よく見ていけ」

岩泉、茫然とした顔でバットを肩にかついでいる。

加藤「岩泉」

岩泉「は、はい」

岩泉、慌てて怒髪天の加藤の顔を見る。

加藤「よく見ていけ」

岩泉「は、はい」

岩泉、力なくバッターボックスへ歩いていく。

スタンドから諦めにも似た拍手が沸く。

加藤「岩泉」

岩泉、気付かず歩いていく。

大村や他の選手たちが岩泉の名前を連呼する。

岩泉、振り返る。誰を見ていいかわからず戸惑う。

加藤、立ちあがるとベンチを出ていく。

○同・一塁側ネクストバッターズサークル（夜）

グラウンドに出てきた加藤を見て、観客から拍手と歓声。

今泉「すいません」

加藤、岩泉の肩を抱くと、

加藤「オマエ、もう、バット振るな」

岩泉、泣きそうな顔で加藤を見る。

加藤「大丈夫。見逃し三振でも俺は怒らん。安心しろ」

岩泉「で、でも」

加藤「オレの言う通りにしろ。もしもバット振ったら、オマエ、来年ずっとファームな」

岩泉「わ、わかりました」

加藤「よし。行け」

加藤、岩泉の背中を叩いて押す。

○同・一塁側ベンチ（夜）

加藤、ドカッと自分の席に座る。

大村「何てアドバイスを」

加藤「ベルトから上のボールを狙え」

大村「ベルトから下しか来ませんよマホームズは」

加藤「アイツじゃ、全部は追えんだろ」

大村「ですが」

加藤「不満なら、ヘッドコーチとしてなんかアドバイスしてこい」

大村「いやいやそんな。私なんぞ」

加藤「ふん」

○同・キャッチャーボックス（夜）

岩泉、バッターボックスに入る。

岩泉「バットを振らない。バットを振らない」

キャッチャーの城戸、岩泉を見上げる。

城戸、三塁側ベンチを見る。

名取がサインを出す。

城戸の声「外のボール球のスライダー？いや

いや、監督」

城戸、名取に向かってミットを振る。

名取、同じサインを出す。

城戸の声「いや、どうしよ」

球審・前沼健司（49）、城戸の背中越しに、

前沼「（今泉を見て）大丈夫か？コイツ」

城戸「あ、えぇ」

城戸、マホームズにサインを出す。

マウンドのマホームズ、うなずく。セットポジションになり、投げる。ボールがすっぽ抜けてバックネットに。

マホームズ、その場で肘を抑えてうずくまってしまう。

騒然となる球場。

名取、ベンチから出てきて黒沼に近づいていく。

黒沼、名取に気づいて近づいていく。

名取「勝呂、勝呂」

黒沼、三塁側ブルペンを見る。勝呂が

茫然とマウンドを見ている。

黒沼「いや、まだ投げてませんよ」

名取「今から投げさす。勝呂」

黒沼「わかりました」

名取、ベンチに戻ろうとして立ち止まり、振り返ると、

名取「８点差あるもんな。大丈夫だよな」

黒沼「えぇ、普通なら」

球審の黒沼が、バックネット裏に向かう。

名取は不安そうな顔で三塁ベンチに戻っていく。

〇同・三塁側ブルペン（夜）

若宮、勝呂から急ぎ足で離れていくと、ホームベースのところで勝呂に向き直り、ミットを構える。

若宮「勝呂さん。早く、早く」

勝呂「マジかよ」

若宮「勝呂さん。マジでヤバいですって」

勝呂、初心者のようなフォームで投げはじめる。
ボールがすっぽ抜け、若宮、ジャンプしてキャッチ。
場内アナウンス「セネターズ、ピッチャー交代をお知らせします。マホームズに代わりまして、勝呂。ピッチャー勝呂」
勝呂、若宮からの返球も受けとらずブルペンを飛び出し、ダッシュでマウンドへ。

○同・マウンド（夜）
勝呂、肘を押さえてしゃがみ込んでいるマホームズのところへやってくる。
勝呂「ティム。マジかオマエ」
マホームズ「ガジローちゃん。ゴメン。肘、イタスギ」
勝呂「マジかよ。なんで、もっと早く…」
マホームズ「ホント、サッキ。サッキよ」
勝呂「マジか…」

マホームズ「タノンダよ」
勝呂「頼んだよってオマエ…」
マホームズ、マウンドを下りていく。
城戸「勝呂さん。アップしました？」
勝呂「あ」
黒沼からボールを受け取った名取が、
マウンドへ。
名取「勝呂、頼むぞ」
名取、勝呂のグラブにボールをねじ込
む。
勝呂「監督、ブルペン戻ります」
黒沼「ダメダメ。良いよ。ココで肩つくれ」
名取「よし。行け」
名取、くるっと振り返ってベンチに戻
ろうとする。
勝呂「いやいや監督」
名取「もう他に誰もいないぞ」
城戸「あとストライク1個だけですって」
勝呂「オマエは、キャッチャーだから言えん
だ」

名取「（勝呂を睨む）」
勝呂「あ…いや」
名取「頑張れ。あと1個のストライク。しかも8点差だ」
勝呂「いやいや、ぼくじゃ無理です」
名取「そこらの高校球児でも行けるだろ」
城戸「勝呂さん。万が一負けたって、誰も責めませんって」
勝呂「いやいや、責めるじゃん。みんな、絶対責めるじゃん」
名取「…」
勝呂「監督、なんか言ってくださいよ」
名取「とにかく投げろ」
勝呂「アレ？なんか肘が痛いぞ」
名取「痛くても投げるんだよ」
勝呂「一生、ぼくの肘が動かなくなってもいいんですか？」
名取「俺が一生、面倒みてやる」
勝呂「それは地獄だ」
名取「とにかく投げんか。男らしゅうないぞ

ッ。九州男児やろ」
勝呂「いやいや生粋のハマッコです」
名取「おまえら守備につけ。散れ、散れ」
内野手、慌てて守備位置へ戻っていく。
名取、ベンチに戻っていく。
勝呂「あ、監督。監督」
名取、勝呂に顔を近づけると、
名取「オマエ、今更、横浜が良いでしたなんて言ってみろ、二度と九州の地は踏めなくなるからな」
勝呂「いやぁ…まいったな」
名取、ベンチに戻っていく。
城戸「じゃ、サインはいつも通りで」
城戸もホームベースに駆けていく。
勝呂「あ、おい。いつものってなんだよ。なんだよいつものって」
黒沼「ま、肩ができるまで好きなだけ投げろ」
黒沼、去っていく。
勝呂、マウンドに一人。グラウンド中から野次が飛ぶ。

観客Ａ「打たれろぉ。勝呂ぉ」
観客Ｂ「金の亡者ぁ」
勝呂「なんで…こんなことに」

○同・貴賓室（夜）
大里、幸田、共に苦々しい顔でマウンドを見ている。
大里・幸田「す、ぐ、ろぉ」
大里、幸田、お互い顔を見合わせて、
大里「いやいや、どうも」
幸田「いやいや、ほんとに。しかし、あとワンストライクですからね」
大里「まだまだわかりませんよ」
幸田「いやいやドラマじゃないですか。ウチの元エースが試合を終わらせる」
大里「元エースですか」
幸田「えぇ。元エースです。今はセネターズさんのエースですから」
大里「いやいや、スターズさんで育てていただいたおかげですよ」

幸田「まぁ、あのままウチにいれば、今みたいな無様な姿を見せることもなかったんでしょうがね」

大里「無様？」

大里と幸田、それまで表面的には友好的だった空気が微妙になる。

○同・キャッチャーボックス（夜）

勝呂、投球練習中。

城戸、勝呂のヘロヘロの球を受け止める。

黒沼「いつになったらピッチ上がるの？」

城戸「いや、こんなもんかと…」

黒沼「じゃあ、試合はじめる？」

城戸「えぇ」

城戸、勝呂に投げ返す。

黒沼「よし。バッター、入って」

岩泉、バッターボックスに入る。

勝呂「待った待った。まだまだ」

黒沼「プレー」

岩泉、バッターボックスで構える。
勝呂、固まる。
城戸、ベンチの名取を見る。名取が球種のサインを城戸に出す。
城戸の声「スライダーか…それしかないよな」
勝呂、ピッチャーズプレートの前で固まっている。

○同・マウンド（夜）
勝呂、城戸のサインを見て、
勝呂「マジかよ…」
スターズファンから野次が飛びつづける。
内野手Ａ「勝呂さん。行きましょ。あと一つあと一つ」
他の内野手からも声があがる。
勝呂「ちくしょー」
勝呂、セットポジションになり、投げる。
ボールがワンバウンド。

城戸、ランナーがいないのでちゃんと捕らない。
黒沼に当たる。

○同・キャッチャーボックス（夜）
黒沼、足をおさえてうずくまっている。

黒沼「ちゃんと捕れよ」
城戸「すいません」
黒沼「あー、いてぇ」
城戸「トレーナー呼びます」
黒沼「いいから。いいから」
黒沼、新しいボールをチェストポーチから取り出し、城戸に渡す。
城戸、勝呂に投げ返す。

×　×　×

勝呂の投げたボールがバックネットに当たる。
スタンドのファンは大歓声。
黒沼「ボール。ファア」
岩泉、ガッツポーズしながら一塁ベー

スへ。
城戸、ベンチを見る。名取、そっぽを向く。
場内アナウンス「８番、セカンド・尾澤。背番号６８」
尾澤光（21）、ネクストバッターズサークルでバットにスプレーを吹きかけるとスプレーを投げ捨ててサークルを飛び出してくる。
尾澤「おっしゃあ」
黒沼「（マウンドの勝呂を見て）大丈夫か？アイツ」
城戸「知りませんよ。俺に言われたって」
尾澤、左バッターボックスに入る。

○同・一塁側ベンチ（夜）
乾いた打球音。
加藤をはじめ、全員が飛び出してくる。
尾澤の打球がライトスタンドに飛び込む。

スタンド大歓喜。ベンチも大喜び。

加藤「よし、ここから。ここから」

大村「（加藤に抱き着く）監督ぅ」

加藤「（大村を振りほどき）バカ。気を抜くな」

大村「やった。やった」

大村、他の選手と抱き合う。

スコアボード、８対２。６点差。

○同・三塁側ベンチ（夜）

乾いた打球音。

笘篠豪（34）背番号２の打球がセンター前に抜ける。

名取「クソっ」

城戸、一塁のベースカバーにも行かずベンチを見ている。

名取「バカ。こっち見るな」

城戸、うつむく。

○同・一塁側ベンチ（夜）

加藤、ベンチを飛び出す。

加藤「代走、代走」
ベンチから飯田大樹（24）背番号３９が飛び出してくる。
一塁ベースで、笘篠と飯田が入れ替わる。
笘篠、ベンチ前に集まった選手たちとハイタッチ。
加藤「まだまだこれからこれから。集中していけ」
選手たち「はいッ」

○同・キャッチャーボックス（夜）
城戸、黒沼からボールを受け取る。
黒沼「まだ６点もある」
城戸「しか、ないの間違いですよ」
黒沼「キャッチャーってのは、まったく」
城戸「他のポジションが楽観的すぎるんですよ」
黒沼「オマエ、俺に喧嘩売ってる？」
城戸「まさか。黒沼さんは審判さんじゃない

ですか」
黒沼「元投手のな」
城戸「失礼しました」
黒沼「すぐ謝るところもキャッチャーだな」
城戸「はは」
黒沼「要領が良いヤツは嫌いだ」
城戸「勘弁してください」
黒沼「ジャッジはちゃんとするよ。俺もプロだからな」
城戸「あの、えーと、黒沼さん？」
黒沼「いいから前向け」
城戸「は、はい」
城戸、マウンドにいる勝呂にボールを投げる。
場内アナウンス「1番、ライト・ゴメス。背番号42」
フリオ・ゴメス（27）が右バッターボックスへ入る。

○同（夜）

1ボール0ストライクからの2球目、
ゴメスの右脇腹に当たる。
ゴメス「ヘイっ」
ゴメス、マウンドの勝呂に向かって気
色ばむ。
城戸「待って。待って」
城戸、ゴメスと勝呂の間に立つ。
ゴメス、城戸の鎖骨付近を殴る。
城戸「うぇ。なんで俺が」
両チームのベンチから選手たちが飛び
出してくる。

○同・一塁側ネクストバッターズサークル（夜）
他の選手たちがグラウンドに集まる中、
五十嵐実篤（37）、ひとりネクストバッ
ターズサークルで素振りをしている。
五十嵐の視線の先に、マウンドにいる
勝呂。
五十嵐「勝呂さん…」
五十嵐の背番号は5。

○（回想）横浜球場・グラウンド（夜）

T・「13年前」

五十嵐と勝呂がチームメートだった頃の話。

五十嵐実篤（24）、背番号58のユニフォームを着てショートを守っている。

マウンドには、五十嵐と同じ横浜スターズのユニフォームを着た勝呂賀次郎（28）。

スコアボードには、0が刻まれている。

ヒットも0。完全試合目前。2アウト、2ボール2ストライク。

球場全体が、「あと1球コール」

勝呂が投げる。【現役バリバリ。13年後とは比べるべくもない凄まじい勢いのストレート】

打球がショートへ。

五十嵐、トンネル。

○（回想）同・マウンド（夜）

スタンドから五十嵐へのヤジが飛ぶ中、
五十嵐マウンドへ。
五十嵐「すいません」
勝呂、笑顔で五十嵐を迎え、
勝呂「このヘタクソ。今すぐ消えてなくなれ」
五十嵐、絶句。

〇（回想）別の試合
五十嵐、ショートゴロを大暴投。
五十嵐の声「俺は、アンタのせいでイップスになった」

〇元のネクストバッターズサークル（夜）
乱闘が終わる。
五十嵐、素振りをして、マウンドの勝呂を睨みつける。
五十嵐「今も治ってねぇんだ。俺は、アンタだけは許せねぇ」
マウンド上の勝呂、あの頃とは比べるべくもない自信のない顔をしている。

五十嵐、素振りのペースが上がっていく。

場内アナウンス「２番、セカンド・五十嵐。背番号５」

ランナー一二塁。８対２。６点差。

○同・一塁ベース（夜）

五十嵐、初級の変化球をセンター前ヒット。

満塁。８対２。６点差。

一塁側ベンチが大騒ぎしているが、五十嵐は冷静な顔でマウンドの勝呂を見ている。

場内アナウンス「３番、センター大浦。背番号１」

スタンドから、ひときわ大きな歓声が沸く。【小次郎】と書かれたタオルやプラカードが一斉に上がる。

スコアボードに表示されるシーズンの成績。出塁率４６３。

○同・バッターボックス（夜）
大浦小次郎（31）、左バッターボックスに立つ。
初球、ど真ん中に来たストレートを見逃す。
黒沼「ストライーク」
城戸「あぶねぇ。マジ、なんなんだよ」
城戸、勝呂に返球。
大浦、マウンドにいる勝呂を睨みつける。

○（回想）横浜球場・左バッターズサークル
（夜）
T・「13年前」
大浦小次郎（18）、空振り三振でゲームセット。
ファン「バカヤロー。辞めちまえ」

○（回想）スポーツ新聞各紙一面
6球団競合の大浦小次郎（18）、スター

ズが交渉権獲得。
高校の制服を着てガッツポーズする大浦の写真。

○（回想）横浜球場・一塁側ベンチ（夜）
大浦、ひとり座っている。
当時の監督の声「オマエ、明日から二軍行け」
大浦、泣いている。
勝呂「大浦」
大浦、顔を上げる。そこには笑顔の勝呂。
勝呂「スカウトなんて当てにならねぇな」
大浦「…」
勝呂「何が６球団競合だよ。ボール球ばっかり振りやがって。はは。このままじゃクビまっしぐらだな」
勝呂、鼻歌をうたいながら去っていく。

○元のバッターボックス（夜）
城戸、ベンチの名取を見る。名取、サ

イン出す。
城戸の声「ボール球のスライダー。あわよくば振ってくれ」
城戸、サインを出す。勝呂、うなずく。
城戸の声「頼むぞぉ。サイン通り投げてくれよぉ」
勝呂、セットポジションから投げる。
低めのボール球のスライダー。
大浦、ぴくりと反応するも見逃す。
黒沼「ボール、ファア」
8対3。5点差。満塁。

○同・一塁ベース（夜）
大浦、一塁ベースの上に立ち、勝呂を見る。
大浦「勝呂さんのおかげで、俺はここまで来れましたよ」
場内アナウンス「4番、ファースト、ゴンザレス。背番号3」

○同・バッターズサークル（夜）

右バッターボックスに、ラファエル・ゴンザレス（34）が入る。

ゴンザレス、勝呂を睨みつける。

城戸「ゴンちゃん。もう勘弁してよ」

ゴンザレス「（流暢な日本語で）まだまだこれからよ」

○（回想）六本木の交差点

T・「13年前」

ゴンザレス（21）、不安そうに立っている。

店の陰から見ている勝呂。

若い女性に声をかけるゴンザレス。

ゴンザレス「お姉さーん。ヤラセテヨ」

女性「きゃあ」

女性たち、逃げていく。

警察官が来て、ゴンザレスを捕まえる。

ゴンザレス「スグロさーん。ス…」

店の陰から勝呂はいなくなっている。

○（回想）スポーツ新聞各紙
スターズの選手、ゴンザレスが逮捕されたニュース。
謝罪会見をしているゴンザレス。

○元のバッターボックス（夜）
ゴンザレス、勝呂を睨みつけ、
ゴンザレス「オマエだけは許さない」

○同・貴賓室（夜）
大里と幸田、並んで座っている。
幸田、興奮を抑えきれない顔。
対して大里は貧乏ゆすりをしている。
幸田「しかしまぁ、まだ5点差ありますからね」
大里「はは。どうですかな」
ゴンザレスが、初球を打つ。
大里、椅子から立ち上がる。
ゴンザレスの打球はふらふらとショートの後方へ。

大里「捕れ、捕れ」

打球は風に揺られ、レフト前にぽとん。

ランナー2人生還。

幸田「やった。やった」

8対5。ランナー三塁二塁。

大里、茫然とする。

○同・一塁側ベンチ（夜）

加藤、球審の黒沼に代走を出す。

友寄勝次（33）が二塁ベースに向かう。

○同・二塁ベース～マウンド（夜）

ゴンザレス、友寄とハイタッチしてベンチに戻っていく時、迂回してマウンドの方へ向かう。

ゴンザレス「ざまぁみろ。バーカ」

勝呂「…」

勝呂、生気のない顔で立っていて、ゴンザレスに何の反応も示さない。

○同・貴賓室（夜）

５番、白戸啓介（25）の打球はピッチャーライナー。

勝呂の体の下にぽとりと打球が落ちる。

大里「投げろ、ファースト。ファースト」

勝呂、ボールをつかむとファーストへ投げる。

大暴投。

幸田「うぉおおお。回れ回れ」

大里「何やってんだ」

ランナー２人生還。

８対７。ランナー二塁。

幸田「よし。よし。よーし」

大里と幸田、完全に目を合わせなくなっている。

○同・三塁側ベンチ（夜）

名取、ベンチを出ていく。黒沼に向かって、右手で４本の指を見せる。

６番のアロンソ・セスペデス（22）、申

告敬遠。
８対７。ランナー一二塁。

○同・マウンド（夜）
名取、マウンドに来る。城戸や他の内野手も来るが、遠巻きに見ているだけ。
名取「どうだ？」
勝呂「ご覧の通りですよ」
名取「５年前のオマエはもういないのか」
勝呂「三年前に膝(左膝見る)やって…俺は、もう終わったんですよ」
名取「（ぽつりと）全員、クビか」
城戸「え？まさか俺らもですか？」
名取「まぁ、こんな負け方したんだ。裏方だけじゃ済まんだろ」
城戸「勝呂さん」
勝呂「俺に言うな」
城戸「いや、リリーフの使い方の問題でしょう」
勝呂「今更言うな」

ベンチから、ピッチングコーチの山村がやってくる。

勝呂「山さん」

山村「…」

勝呂「なんか言って」

黒沼「（ホームベースから近づいてきて）そろそろ時間です」

名取や城戸、他の選手たちが醒めた感じで離れていく。

山村と黒沼だけが残る。

勝呂「山さん」

山村「今のオマエでいいじゃないか」

勝呂「…」

山村「通算１９２勝のプライド、ソレだけを見せてくれ」

黒沼「ココに立つ苦しみも、悔しさも、俺たちピッチャーにしかわからんよ」

勝呂「黒沼さん」

黒沼「あ…でも仕事は仕事でちゃんとするからな」

黒沼、ホームベースに戻っていく。

山村「球場の照明塔って、マウンドが一番輝くように設計されてるらしいな」

勝呂「今はただの晒し者ですよ」

山村「この試合も、この球場も、ぜーんぶオマエのもんだ」

勝呂「でもね山さん…」

山村「いいんだ。全部、オマエの好きにしろ」

勝呂「山さん」

山村「昔のことなんて考えるな。今のオマエで投げろ」

勝呂「…」

山村「腐ってもピッチャーだろ」

勝呂「リトルリーグだけど？」

山村「いやいや、草野球、草野球」

勝呂「わかりましたよ」

山村「任せた」

山村、ベンチに戻っていくも立ち止まって振り返ると、

山村「勝呂。やっぱ野球はピッチャーだよな」

山村、ニヤッと笑い、去っていく。
勝呂、マウンドでボールを見つめる。
その手が震えている。
勝呂「こんなに、手が震えたことあったっけな」

○同・三塁側ベンチ（夜）
岩泉、ネクストバッターズサークルで足ガクガク。
加藤、見かけて立ち上がると、
加藤「代打だ。代打」
大村「もう、誰もいません」
加藤「は？」
壁に貼られた選手名の書かれたボード。
誰もいない。
大村「監督しか…」
加藤「なら、俺が行く」
加藤、ヘルメットとバットを取り、グラウンドへ。
勢い込んで飛び出したせいで、カクテ

ル光線をもろに目に浴びてしまう。
加藤の声「し、しまった」
○同・右バッターボックス（加藤の視界）（夜）
スタンド大歓声。
加藤が右バッターボックスへ。しかし、
眩しくてよく見えていない。
○（回想）横浜球場・一塁側ロッカールーム
T・「１３年前」
加藤良助（２８）と勝呂が言い争っている。
加藤「オマエ、ほんとにソレでいいのか」
勝呂「あぁ。決めたんだ」
加藤「俺たちで、スターズを強くするって約束したじゃないか」
加藤、左手にはめたＧショックを見せる。勝呂の通算５０勝を記念した時計。
加藤「オマエの１００勝、１５０勝、２００勝のボールも俺に受けさせてくれよ」

勝呂「すまん」
加藤「幸田さんに何て言われたんだ」
勝呂「俺は、スターズに残るつもりだった。強いチームにしたい。優勝するのが当たり前のチームにしたい。そのための話し合いがしたかった。なのにあの野郎…優勝なんてしなくて良いとか言いやがった」
加藤「ほんとかよ」
勝呂「それでもオーナーかよ。優勝目指してないチームで、どうやって戦えばいいんだ」
加藤「そ、そんなの関係ねぇよ。俺たちで変えてやろうぜ」
勝呂「金も出さないってことだぞ。どうやって勝つんだよ」
加藤「勝てる。勝てるよ。やるのは俺らだ」
勝呂「俺は、セネターズに行く」
加藤「セネターズ？あんな弱いチームに」
勝呂「あそこは本気だ。本気で強くなろうとしてる」
加藤「オマエ、本気で言ってんのか？野球人

生終わるぞ」
勝呂「俺は、ビジョンのあるチームで野球がやりたい」
加藤「ふざけんな。どうせ金だろ」
勝呂「オマエも来ないか。来年、ＦＡだろ」
加藤「オレは横浜生まれの横浜育ちだ。横浜で生きて、横浜で死ぬんだ。オマエもそうじゃなかったのかよ」
勝呂「そうだよ」
加藤「じゃあ何で」
勝呂「横浜は好きだ。でもな、それ以上に、勝ちたいんだ」

○元のバッターボックス（夜）
加藤、マウンドにいる勝呂をにらみつけている。
黒沼「加藤。加藤」
加藤「あ、はい」
黒沼「外せ。ソレ」
加藤「え？」

黒沼「時計」

加藤「あ」

黒沼、指さした先、加藤の左腕には、塗装のはげた勝呂５０勝記念のＧショックがはめられている。

加藤、マウンドの勝呂に見えないよう隠しながら外そうとするも、眩しくてうまく行かない。

加藤「あ、すいません。いや、コレ、Ｇショックって頑丈なもんで。ほんとに」

黒沼「何言ってんだオマエ」

城戸「大丈夫ですか」

加藤「あぁ、大丈夫大丈夫」

加藤、時計を外し、ユニフォームの尻ポケットに時計を入れる。

×　×　×

勝呂、城戸のサインにうなずく。セットポジションからストレートを投げ込む。

スピードガンで１３７キロ。

黒沼「ストライーク」

加藤の視界は、まだよく見えていない。

○（回想）横浜球場・キャッチャーボックス

（夜）

T・「13年前」

勝呂のストレートが、加藤が構えたミットに収まる。

スピードガンで154キロ。

球審「ストライーク」

○元のバッターボックス（夜）

勝呂、スライダーを投げ込む。ほとんど曲がらない。

黒沼「ストライーク」

加藤の視界、大分、クリアになってきている。

○（回想）横浜球場・キャッチャーボックス

（夜）

T・「13年前」

勝呂のスライダー。真横にピュッと曲がり、打者のバットが空を切る。

球審「ストライーク」

○元のバッターボックス（夜）

城戸、勝呂に返球。

加藤「オマエ…もうこんな球しか投げれなくなっちまったのか」

○同・マウンド（夜）

勝呂、肩で息をしている。

勝呂「膝がいてぇ」

勝呂、マウンドで一人。

勝呂「もう無理だ」

スターズのファン「勝呂ぉ、頑張れぇ」

勝呂、加藤の応援歌が鳴り響くグラウンドで、顔を上げる。スタンドを見回す。誰もが、勝呂を敵意のある目で見ている。

勝呂「ついに耳までおかしくなっちまったか」

○（回想）同（夜）

スターズ時代のいつかの試合。

勝呂、スターズのユニフォームを着ている。

完封目前。

あちこちから勝呂への声援が鳴り響く中、勝呂、自信満々に振りかぶる。

○元のマウンド（夜）

ボロボロの勝呂。

スライダーがワンバウンド。城戸、体に当てて前へ落とす。

黒沼「ボール」

球場から大歓声。

ランナーがそれぞれ進塁。

８対７。ランナー二三塁。

大盛り上がりの横浜球場。

勝呂、城戸からの返球を受ける。

スターズのファン「勝呂ぉ、頑張れぇ」
勝呂、顔を上げる。
スタンドから、ぽつぽつと勝呂を応援する声が聞こえてくる。
勝呂、スタンドを見る。スターズのファンの中に、ちらほら、勝呂を心配そうに見ている人がいる。
勝呂「バカか。横浜にいられなくなるぞ」
勝呂、城戸のサインを覗き込む。スライダー。
勝呂、サインにうなずき、投げ込む。
加藤、特大のレフト線へのファールを打つ。
球場大歓声。
勝呂、自分の右膝を見る。
勝呂「次で、最後か」
スターズのファン「勝呂ぉ、思いっきり行け」
スターズのファン「勝呂ぉ、頑張れぇ」
勝呂、スタンドを見る。
勝呂を声援するスターズのファンがい

る。

勝呂「思いっきり…か」

○同・貴賓室の廊下（夜）

完全試合を達成した勝呂の写真。

○元のマウンド（夜）

勝呂、城戸のサインを覗き込む。

城戸、スライダーのサイン。

勝呂、首を横に振る。

城戸、名取の方を見る。

そして同じサイン。

勝呂、首を横に振る。

城戸、同じサインを出す。

勝呂、首を振る。

城戸、名取を見る。

○同・三塁側ベンチ（夜）

名取、溜息をつき、城戸にサインを送る。

山村、名取の隣に立ち、

山村「監督。ココは、勝呂に託しましょう」

名取「この場面、ストレートはありえない」

山村「打たれたら、私の責任で良いです」

名取「クビ切られるのは俺だ」

山村「私から、オーナーに言いますから。最後の場面、好きにさせたのは私です、と」

名取「絶対だな」

山村「えぇ」

名取「ピッチャーはウソつきだから」

山村「キャッチャーの方こそ」

名取「なんだと」

山村「最後のストレートは、私の指示です。天地天命に誓って」

名取「まったく。だからダメなんだピッチャーは。美学のせいで野球を壊す」

山村「ありがとうございます監督」

名取「どうなっても知らないからな」

名取、ストレートのサインを城戸に送る。

○同・マウンド（夜）
勝呂、城戸のサインにうなずき、セットポジションになる。

○同・バッターボックス（夜）
加藤、バッターボックスから見ている。

○（回想）横浜球場・キャッチャーボックス（夜）
T・「13年前」
いつかの試合中。
2ストライク、ランナー二塁。
キャッチャーをしている加藤、マウンドの勝呂にストレートのサインを出す。
加藤の声「勝呂、まっすぐだ。まっすぐ」
首を3回（けん制）、二塁ランナーにしてから投げる。

○元のバッターボックス（夜）
勝呂、同じ仕草をする。

加藤「変わってねぇな。そのクセ」
勝呂、ストレートを投げ込む。
加藤、バットを振りだす。
１３７キロのストレート。しかしバッターの手元でグイッと伸びる。
打球、つまってボテボテのピッチャーゴロになる。

○同・マウンド（夜）
勝呂、マウンドを駆け下りていくも、転ぶ。
諦めかけていた加藤。慌てて全速力で走り出す。
勝呂、倒れ込んだままボールを掴み、立ちあがると一塁に投げる。

○同・ホームベース～ファーストベース（夜）
三塁ランナーがホームインする瞬間と、加藤が一塁ベースにヘッドスライディングした瞬間、そして一塁手がボール

を掴んだ瞬間が重なる。
一塁塁審の右手が上がる。
塁審「アウト、アウトぉ」

○同・マウンド（夜）
勝呂、そのまま倒れ込む。
城戸が勝呂に抱き着く。
城戸「勝呂さーん」
野手たちが集まってくる。
試合終了。

○同・貴賓室（夜）
大里、ジャンプして喜ぶ。
がっかりとする幸田。
大里「やった。勝った、勝ったぞぉ」
幸田「ウソだろ」

○同・三塁側ベンチ（夜）
選手たちが飛び出していく中、名取と
山村だけが残る。

山村「監督、行きましょうよ」
名取「オーナー、どうだ？」
山村、ベンチから顔を出して貴賓室の方を見る。
山村「すいません。私、目が悪くて。でもきっと、手叩いて喜んでますって」
名取「いいか。俺は、納得してないからな。あの場面は、ストレートじゃない」
山村「ですかね」
名取「やったぁ、優勝だぁ」
名取、ベンチから飛び出していく。
山村「まったく…キャッチャーって生きモンは」
山村、もみくちゃにされる勝呂を見て、
山村「勝呂。やっぱり、野球はピッチャーだよな」
山村もベンチを出ていく。
○同・マウンド（夜）
選手たち、いなくなっている。

グラウンドキーパーが整備中。

○同・スタンド（夜）

清掃員たちが片付け。

観客はいない。

○同・貴賓室（夜）

真っ暗。

○同・地下駐車場（夜）

アイドリングしている車の前に立つ大里。向かいに幸田。

大里「いや、本当になんと御礼を言っていいやら」

幸田「いやいや、最後は、ウチの元エースがやってくれましたな」

大里「ほんと運が良いだけで。あのバカ」

幸田「バカはやめていただきたい。大切なウチの選手なんですから」

大里「今は、我がチームのエースです」

幸田「エース？ろくに投げさせもしないで」
大里「権限は監督です。私じゃあない」
幸田「私ならね、彼を先発で使いますよ」
大里「何を言うか。あんなポンコツ」
幸田「なら、クビにしなさいよ。ウチがすぐ獲りにいくから」
大里「魂は、福岡にあるんです」
幸田「生まれて育った横浜にあるに決まってる」
大里「もう１３年も福岡にいるんだ。立派な九州人ですよ」
幸田「簡単なもんだな九州は。横浜だったらね、１３年ぽっちじゃ横浜人なんて認めませんよ」
大里「それは横浜が冷たいからでしょ」
幸田「何を言うか」
大里「絶対、アイツのことは渡さん。生涯、福岡だ」
幸田「何を言うか。返せ」
大里「返すもんか」

幸田「返せよ。今すぐ」
大里「ふざけるな。誰が渡すか」
大里と幸田、取っ組み合いをはじめる。
スタッフたちが止めに入る。

○同・三塁側ロッカールーム（夜）
勝呂、トレーナー室で膝のアイシング
をしている。
名取、やってくる。
名取「どうだ。具合は？」
勝呂「最悪ですよ」
名取「歩けは、するだろ」
勝呂「来年は？」
名取「さっき、オーナーは帰られた」
勝呂「聞いてないんですか？」
名取「ご機嫌だったからな」
勝呂「ご機嫌な時に聞かないと」
名取「空気がガラッと変わるのが怖いんだよ。
あの方は、そういう方だ」
勝呂「来年、どうすっかなぁ」

名取「横浜、帰れよ」
勝呂「帰れませんよ。金で、福岡に行ったと思われてんだから」
名取「そうなんだろ？」
勝呂「年俸は、横浜の方が良かったですよ。将来の監督手形もあった」
名取「そうだったのか」
勝呂「でも、福岡の方が、強くなるビジョンがあった。だから来たんです」
名取「よっ、１３５勝のエース」
勝呂「この背番号も変えてもらいますよ。ま、来年があればですけど」
山村、入室。
山村「まぁ、今は、優勝を味わいましょうや」
名取「山さん」
山村「最後のストレート、良い球だったな」
勝呂「どっちでもよかったんですけどね。正直。でも本当に最後になるかもしれなかったから」
山村「完全試合の時も、最後はまっすぐだろ」

勝呂「スライダーです」
名取「俺はな、あの場面、スライダーだった
と思う」
山村「何を今さら」
名取「結果論だろ」
山村「だからキャッチャーってのは」
名取「うるさいよ。キャッチャー、キャッチ
ャーって」
勝呂「監督、山さん」
名取と山村、勝呂を見る。
勝呂「俺、今年で引退します」
名取・山村「勝呂」
山村「良いのか？２００勝」
勝呂「もう、プロの球じゃないし、リハビリ
ってモチベーションでもないし」
名取「そうか」
山村「あと８勝じゃないか。２００勝まで」
名取「山さん」
山村「俺は、１６０勝しかできんかったから
諦めがついた。オマエ、あと８勝だろ。チ

ーム変えてもさ」
勝呂「今から、チーム代えてまで投げるのは
キツイです」
山村「勝呂」
名取「山さん。もう」
山村「いや、２００勝って、そんなもんじゃ
ないでしょ」
名取「俺にはピッチャーの気持ちはわからん
よ。でも、本人の気持ちがさ」
山村「いや、でもね」
勝呂「山さん。とりあえず今は、そんな感じ
なんです。なんか、ティムの肘のことも気
になるし、とりあえずオフはコーチに専念
しますよ。まぁ、来年もあればですけど」
３人、しゅんとなる。
球団職員（若い女性）入室。
職員「祝勝会会場に移動してください」
名取「あぁ。わかった。勝呂、オマエ行ける
か？」
勝呂「いや、まともに歩けないんで、病院行

きます」
山村「俺も付きそうよ」
勝呂「いや、山さん。俺、一人で行けるんで。
祝勝会、出てください」
山村「しかし」
勝呂「優勝投手からのお願いですよ」
山村「勝呂」
勝呂「一応、そうでしょ？」
山村「立派な優勝投手だよ」
名取「そうだよ。立派な優勝投手だ。ありがとう。ありがとうな勝呂」
山村「ありがとう勝呂」
勝呂「何をおっしゃいますやら」
勝呂、名取と山村に向かって笑いかける。

○同・地下駐車場（夜）
勝呂、車椅子に乗っている。球団職員（若い男性）が後ろに付き、押してくれている。

加藤の声「ずいぶんと無様な姿だな」
加藤、駐車場の柱から現れる。
勝呂「（職員に向かって）少し、二人にしてくれ」
職員「は、はい」
職員、エレベーターホールに戻っていく。
勝呂「悔しいか？」
加藤「キャッチャーってのはな、悔しいことばっかり憶えてるんだ」
勝呂「卑屈だねぇ」
加藤「みんな１６０キロ投げてくれたら、こんな思いしなくて済むんだよ」
勝呂「オマエらは、受けるだけだからそんなことが言えんだ」
加藤「ピッチャーって生きモンは、自分のことしか喋らん」
勝呂「キャッチャーもそうだろ。ていうか、何しにきた」
加藤「別に。クビなんだろ、オマエ」

勝呂「まだ決まったわけじゃねぇよ。優勝投手だぞ。俺は」
加藤「あんなヘロヘロの球で」
勝呂「そのヘロヘロの球、打てなかったのはどこのどいつだ」
加藤「俺もな、バッターボックス立ったの3カ月ぶりなんだよ。一介のコーチと監督じゃな、やることのレベルが全然違うんだよ」
勝呂「相変わらずムカつくヤツだな」
加藤「お互い様だ」
勝呂「で、そっちのクビはどうなんだよ」
加藤「俺は、あと2年契約がある。日本シリーズにチームを導いたしな」
勝呂「リーグ三位だったくせに」
加藤「それはプロ野球機構に言え。ウチはルールに従っただけだ」
勝呂「でも最後の最後で負けたけどな」
加藤「クソっ。あとちょっとだったのに」
勝呂「采配ミスだろ」
加藤「それはそっちもだろ」

勝呂「俺は一介のコーチに過ぎないからな」
加藤「でもブルペンはオマエの責任だろ」
勝呂「最後の権限は監督なんだろ。違うか？」
加藤「クソっ。ああいえばこういう。相変わらずヤなヤローだぜ」
勝呂「お互い様だ」
加藤「オマエ、いつまで無様な姿さらすつもりだ」
勝呂「どういう意味だ？」
加藤「現役だよ。俺は、今年で辞めるつもりだ。監督に専念する」
勝呂「俺も、辞めるよ」
加藤「…」
勝呂「今年で辞める」
加藤「どうすんだよ。あと８つだろ」
勝呂「デジャブか」
加藤「２００勝、しなくていいのか」
勝呂「したくて出来るんだったら、してるよ。でもな、もう１００球近く投げる自信がない」

加藤「らしくないな」
勝呂「力がなくなりゃ、そんなもんだろ」
加藤「オマエ、行くとこないのかよ」
勝呂「さぁな」
加藤「横浜、帰ってくるか？」
勝呂「は？無理だろ。そんなの」
加藤「俺から、オーナーに言ってやるよ」
勝呂「幸田に？やめてくれよ」
加藤「あの人は変わったよ。だからチームも強くなってきた。球場だってさ…」
勝呂「もう、投げられない」
加藤「勝呂」
勝呂「福岡に行ってからはさ、スピードも出なくなって、騙し騙し投げてた。コントロールやら駆け引きやら、なんか、そういうのが楽しい時期もあったよ。でも、それもできなくなった時にさ、思い出しちまったんだよ」

○同・貴賓室の廊下（夜）

勝呂が、完全試合をした写真。

勝呂（声）「何も考えずに、思いっきり腕振ってた頃の自分を」

○同・地下駐車場（夜）

勝呂と加藤、向かい合っている。

勝呂「最近は、若いピッチャーの指導の方が楽しくなってきた」

加藤「クビになるんだろ」

勝呂「わからん」

加藤「横浜に帰ってくるのか？いや、現役とかじゃなく」

勝呂「それもわからん。向こうに家もあるしな。ま、まずは膝の治療からだ」

加藤「現役でやるなら言ってくれ。俺がオーナーに言うから」

勝呂「もう良いって」

加藤「俺が受けるよ」

勝呂「は？」

加藤「俺がオマエの球を受ける」

勝呂「オマエ、現役辞めるんだろ」
加藤「オマエが戻ってくるなら、俺だろ。俺な、ダメなピッチャー受けるの上手いんだよ。リードで何とかしてやる」
勝呂「何がリードだよ」
加藤「裏かいてさ。低めの変化球で内野ゴロ打たせてさ」
勝呂「空振り三振がとれなくなった時点で、もう終わりなんだよ。俺は」
加藤「ほんとに話がかみ合わないな」
勝呂「そりゃそうだろ。俺とオマエは…」
勝呂・加藤「ピッチャーとキャッチャーなんだから」
二人の声が、駐車場の中にこだまする。
二人、顔を見合わせて笑う。
加藤「じゃあな。早く足治せよ」
勝呂「あぁ。リーグ優勝おめでとう」
加藤「オマエ、いつも一言多いんだよ」
加藤、くるっと振り返ると歩き出し、
加藤「日本一、おめでとう」

勝呂、加藤の背中を見ている。

○同・球場の全景

T・「数日後」

ラジオアナウンサー（声）「昨日、福岡セネタ
ーズは名取監督、山村ピッチングコーチ、
勝呂選手兼ピッチングコーチの契約を、２
年間更新することで合意しました」

○同・貴賓室の廊下

勝呂、完全試合の写真。

ラジオアナウンサー（声）「勝呂選手兼コーチ
は、現役を引退し、ブルペンコーチに専念
するとのことです。勝呂投手からのコメン
トです。「スターズで完全試合をした時のよ
うなボールが、投げられなくなり、引退を
決意しました。これまで自分を支えてくれ
たセネターズの関係者の皆さん、本当にあ
りがとうございました。そして何よりも、
自分を育ててくれたスターズの関係者には、

筆舌に尽くしがたい感謝の念でいっぱいです。これからも野球界に貢献できるよう頑張ります」

写真に写る勝呂の笑顔。

（終わり）

２００字原稿用紙換算：２２４枚